

明治を駆けつけた牛鍋チェーン 木村莊平の天晴れ一石二鳥

文明開化の明治には、時代を象徴する型破り人間が多かった。時代そのものがドラマもどきだったからである。

そんな一人、木村莊平は、さながら明治の「牛鍋文化」を象徴するようなご仁。まだ流通革命だの大量仕入れだのといった観念などのなかった時代、いち早く牛鍋のチェーン店を計画したのだから、ただ者ではない。

莊平は、文明開化を象徴する牛鍋の人気をいち早く見て取るや、東京市内に「いろは四十八店」をオープンさせることを計画、明治三十九年に六十六歳で他界するまで、少なくとも二十数店を開店させたといわれる。

おもしろいのは、店のネーミングを決めるに当たって、すべての店名を「いろは」とし、それぞれを第一いろは、第二いろはというようにナンバーで区別したこと、店の経営を多数の愛人にやらせたこと。その莊平は、夜になると人力車で各店を回り、革袋を持って集金に努めたといわれ、莊太、莊八、莊十、莊十二などあいついで子どもが生まれた。彼が認知しただけでも三十人を超えたというから見事な多角経営。

自ら「いろは大王」と称した。



三十人の子どものうち、莊太は翻訳、評論などのほか、武者小路の「新しき村」運動に参加。莊八は「牛肉店帳場」のパンの会などの洋画や挿絵、「東京の風俗」「東京繁昌記」などのエッセーで知られ、莊十は小説家、莊十二は映画監督（代表作「兄いもうと」）として名をなした。

「いろは」は、明治十九年ごろから評判になり始め、三田の四国町に本店があったが、明治三十七年ごろの値段は、牛鍋一人前が十五銭。コース二十銭、ネギのぶつ切り三銭などで、大正の初めごろまでほとんど値段が変わらなかつた。もともと、「第一いろは」「第二いろは」などナンバーつきの店のほか、ナンバーなしの「番外店」があり、そこでは「いろは」の残りものを売り、値段も安かったというからなかなかの「商才」。なお莊平は「いろは」の座敷の障子に五色のガラスをはめこんで話題になったほか、日本で初めての赤レンガ造りの火葬場をオープンさせたことでも異才ぶりを発揮。ただ、こちらの方は料金が高くて利用者がなく、彼自身が第一号の客になったという「伝説」も残されている。